

## 研究

## 児童期における感情表出性尺度日本語版の開発

三浦 浩美<sup>1)</sup>, 勝間 理沙<sup>2)</sup>, 山崎 勝之<sup>2,3)</sup>

## 〔論文要旨〕

この研究の目的は、Eisenberg ら<sup>5)</sup>によって開発された、教師評定による感情表出性尺度の日本語版を作成することであった。研究1では、質問紙の因子構造と内的整合性を調べるために、23名のクラス担任が小学校4～6年生(561名)を対象に質問紙に記入した。さらに、テスト-再テスト信頼性を調べるために、これらの担任のうち11名(児童275名)を対象にして、およそ4週間後に再調査を行った。因子分析の結果、1因子構造であること、質問紙の信頼性と内的整合性があることを確認した。研究2では、358名の児童に物語り法、179名の児童に仲間評定を用いて構成概念妥当性を検証した。尺度の妥当性を高めるための調査方法の工夫や尺度項目の精選など、さらなる研究が必要と考えられた。

Key words : 感情表出性尺度, 教師評定, 尺度開発

## I. はじめに

近年、感情研究の分野では感情制御(emotion regulation)が着目されている。「感情制御は、感情的反応を増加、保持もしくは減少するために使用する意識的無意識的方略のすべてを含む<sup>1)</sup>」ものである。そして、感情をどのように制御するかを、より特性的に表出と不表出という側面から捉えたものが感情表出性(emotion expressivity)である。

対人場面で感情を適切にコントロールして表出することは、社会からの拒絶を防ぎ、恩恵を得やすくする重要なスキルであるが、逆に心身への負担を強いることもある<sup>2)</sup>。そして感情表出の適切さは文脈に依存しており、表出性の極端な個人は社会的に不利におかれる<sup>3,4)</sup>。またネガティブ感情の表出が非常に高いか、

もしくは不表出な幼児は問題行動を外在化する傾向がある<sup>5,6)</sup>。このように、極端な感情表出性が日常生活に支障を及ぼすような行動につながるばかりでなく、気管支喘息の子どもたちが、ストレスの多い努力状況での怒り・喜びと驚きの表現が少ない<sup>7)</sup>など、疾患との関連が欧米で明らかになっている。今後、感情表出性が健康・適応とどのような関連があるかをさらに明確にできれば、健康・適応状態を促進する関わりへの示唆が得られると考える。

日本では子どもの感情表出性についての研究は、対人関係に関する発達的研究などが主に行われており<sup>8-10)</sup>、感情表出性は観察法や物語り法により測定され、一般化が難しい状況である。今後健康・適応との関連を明らかにしていくためには、まず測定法から検討する必要がある。

Development of the Japanese Version of the Emotional Expressivity Scale for Children

Hiromi MIURA, Lisa KATSUMA, Katsuyuki YAMASAKI

1) 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科(研究職/看護師)

2) 岡山大学大学院法務研究科医療・福祉リーガルリスク予防研究センター(研究職)

3) 鳴門教育大学予防教育科学教育研究センター(研究職)

別刷請求先: 三浦浩美 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1

Tel: 087-870-1495 Fax: 087-870-1204

[2223]

受付 10. 3.15

採用 11. 6.27

感情表出性を測定する方法には、感情価を弁別して測定する尺度<sup>11,12)</sup>や観察法<sup>13)</sup>などがある。しかしこれらの測定法は構成概念があいまいであるか、感情の種類や手段など、感情表出の特定の特徴だけに集中する等の問題がある<sup>14,15)</sup>。そのため Kringら<sup>14)</sup>は、感情表出性を感情価または手段に関係なく、表明する方に向かう、一般的な性質として、1因子構造の尺度 Emotional Expressivity Scale (EES 尺度)を作成した。さらに Eisenbergら<sup>5)</sup>は、この EES 尺度をもとに教師評定による子ども対象の尺度を作成した。そこで本研究は Eisenbergら<sup>5)</sup>の尺度をもとに、日本の児童を対象にした尺度を作成することを目的とし、研究1で EES 尺度日本語版の内的整合性、因子的妥当性の検討、研究2で構成概念妥当性の検討を行った。

なお、子どもの年齢は、Eisenbergら<sup>5)</sup>の研究でも同程度の年齢を対象にしていること、心理的離乳の時期を迎え感情表出と健康・適応上の問題が顕在化しはじめる年齢であること<sup>16)</sup>、自己評価が可能になる年齢であることから、小学4～6年生の年齢の児童を対象とした。

## II. 研究 1

### 1. 目的

研究1の目的は、EES 尺度日本語版の内的整合性、因子的妥当性を検討し、基礎統計量を得ることであった。

### 2. 調査方法

#### i. 研究参加者

研究参加者は、A県内の小学生561名(4年男子95名、同女子80名、5年男子92名、同女子84名、6年男子105名、同女子105名)およびその担任23名(男性9名、女性14名)であった。このうち小学生275名(4年男子32名、同女子28名、5年男子60名、同女子53名、6年男子52名、同女子50名)とクラス担任11名は再テスト対象者として依頼した。再テストは、学年および男女の差が少なくなるよう留意し、同意が得られた教員に依頼した。

#### ii. 質問紙ならびに調査手続き

Eisenbergら<sup>5)</sup>の作成した EES 尺度版17項目を、著者らを含め心理学研究に携わる研究者5名で原尺度の意味内容を損わないよう適切に翻訳した。

評定は原尺度と同様に、感情を表出する内容の項目を「決してそうではない」1点から「いつもそうだ」

6点の6件法とした。逆転項目(感情を表出しない内容の項目)は「決してそうではない」6点から「いつもそうだ」1点と逆に配点し、総合計点が高いほど感情表出性が高いことを示す配点とした。

調査はクラス担任に評定を依頼し、2009年7月～8月に実施した。再テストを行う場合は、初回実施から約4週間後に行うように依頼した。再テストの期間は、原尺度作成時に4週間で行っていること、夏休み期間中に教員が実施できること、さまざまな教育活動による教師および児童の変化・成長という影響要因を最小限に留めることを考慮し設定した。

#### iii. 倫理的配慮

学校長およびクラス担任に研究目的、方法、等を説明し、同意を得て行った。調査は夏休み中など、クラス担任の負担の少ない時を選択してもらった。データ処理時も匿名化するため学校および個人の特定はできないことを説明した。以上の内容の理解を得て、研究参加の同意を得た。

## 3. 結果

### i. 因子的妥当性および内的整合性の検討

質問紙の因子的妥当性を検討するため、主因子法による因子分析を行った(表1)。まず561名全員を分析対象とし、固有値1以上の基準で1因子が抽出された。いずれの項目も因子負荷量は.40以上であり、寄与率は58.61%であった。次に男女別でも因子分析を行い、いずれも1因子構造、因子負荷量.40以上、寄与率は55～60%であり、因子的妥当性が認められた。この結果より、全項目を尺度を構成する項目とし、その合計点を尺度得点とする方向で検討を進めた。

内的整合性の検討のため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、全員および男子女子共に.95～.96の高い値を示し、十分な内的整合性が認められた。

### ii. 安定性

2回にわたって実施された EES 尺度日本語版の各合計点のピアソン相関係数を算出した。全体 $r=.89$ 、男子 $r=.91$ 、女子 $r=.85$ と高い値が得られ、EES 尺度日本語版は高い安定性をもつ尺度であることが示された。

### iii. 基礎統計量

この尺度の基礎統計量を表2に示す。全体の平均点は66.1点、男子は68.6点に対し女子は63.4点であった。性別で感情表出性尺度得点の差があるかどうかについ

表1 EES尺度日本語版の質問項目および探索的因子分析における因子負荷量

項 目	因子負荷量		
	全員	男子	女子
1 この子どもは、感情を表に出すほうだと思う。	.868	.872	.858
2 人は、この子どもを感情的でないと思っている。*	.759	.764	.742
3 この子どもは、自分の感情を自分自身の中に留めている。*	.785	.807	.749
4 この子どもは、他の人から、周りのことに無関心だと思われることが多い。*	.538	.543	.529
5 人は、この子どもの感情を読み取ることができる。	.801	.816	.773
6 この子どもは、自分がどう感じているかを他人に見せることが好きではない。*	.757	.775	.727
7 この子どもは、人の前で泣くことができる。	.618	.597	.629
8 この子どもは、たとえ感情を強く感じていたとしても、人に自分の感情を見せない。*	.836	.837	.826
9 人は、この子どもが感じていることを容易に見ることはできない。*	.812	.842	.767
10 この子どもは、あまり感情を表に出さない。*	.904	.916	.886
11 この子どもは、強い感情を体験しているときでさえ、外見上はその感情を表さない。*	.831	.853	.799
12 この子どもは、自分がどう感じているかを隠すことができない。	.587	.578	.571
13 この子どもは、人に自分の感情を表さない。*	.890	.900	.877
14 人は、この子どもをとて感情的だと思っている。	.619	.618	.597
15 この子どもがどう感じているかは、人が思う“この子どもはどう感じているか”とは違う。*	.585	.616	.543
16 この子どもは、自分の感情を内に留める。*	.812	.848	.758
17 この子どもは、自分の感情を人に示す。	.863	.874	.844
寄与率 (%)	58.61	60.46	55.14
$\alpha$ 係数	.96	.96	.95

\*逆転項目

表2 EES尺度教師評定翻訳版の統計量

	平均値	中央値	標準偏差	最小値	最大値	尖 度	歪 度
全 体	66.1	65	14.90	20	102	.16	.08
男 子	68.6	66	15.17	20	102	-.19	.20
女 子	63.4	63	14.13	21	100	.38	-.15

\*\* $p < .01$ 

て  $t$  検定を行ったところ有意差がみられた ( $t=4.21$ ,  $df=559$ ,  $p < .01$ )。尖度、歪度の分布からその歪みは小さく、概ね EES 尺度得点は正規分布していることが示唆された。

### Ⅲ. 研究 2

#### 1. 目的

研究2の目的は、研究1で因子的妥当性、内的整合性および安定性が確認された EES 尺度日本語版の構成概念妥当性について確認することであった。

#### 2. 調査方法

##### i. 研究参加者

研究1で、EES 尺度日本語版で評定した561名の小学生のうち、358名(4年男子63名、同女子54名、5年男子63名、同女子67名、6年男子56名、同女子55名)に物語り法、179名(4年男子29名、同女子26名、5年男子13名、同女子12名、6年男子48名、同女子51名)に仲間評定を実施した。どちらの調査を行うかは、校

長先生およびクラス担任の意向を確認し、学年および男女差が少なくなるよう留意して決定した。

##### ii. 質問紙ならびに実施手続き

###### a) EES 尺度日本語版

研究1で作成された質問紙を使用した。質問紙は全17項目であり、その合計得点が尺度得点となり、得点範囲は17~102点であった。

###### b) 物語り法

感情を経験する簡単な短文を読み、「自分ならそのときに感じる気持ちを他者に表出するか」を「ぜんぜん表さない」1点から「いつも表す」4点の4件法で自己評定してもらった。

感情を経験する簡単な短文とは、日常的に経験しやすく表出されやすい、楽しさ、喜び、怒り、悲しみの4つの感情を喚起するであろう文章を著者らを含めた心理学研究の研究者5名が作成したものであり、各3文計12文で構成していた(表3)。楽しさを喚起する文章の例は「家族全員で遊園地に遊びにいきました。たくさんの遊具で遊びました」、喜びを喚起する文章

表3 物語り法質問項目

感情の種類	番号	質問項目
喜び	1	テスト勉強をがんばったら、今までで一番いい点数がとれました。みんなにもほめられました。
	6	はじめて会ったしんせきのおじさんがお年玉をくれました。
	8	何度も何度も練習をしていたら、苦手だった鉄棒ができるようになりました。
楽しさ	3	家族全員で遊園地に遊びにいきました。たくさんの遊具で遊びました。
	9	友だちと一緒に、クラスのクリスマス会で交換するプレゼントを買いに行きました。
怒り	12	クラスで育ててきたさつまいもを掘りました。みんなでワイワイ言いながら、大きいものをたくさん掘りました。
	2	友だちと遊ぶ約束をしていました。しかし時間がきても友だちは来なくて、遊べませんでした。後で聞いたら「忘れていた」とその友だちは言いました。
	5	大好きなおもちゃを友だちに貸したら壊されました。しかし友だちは謝ってくれません。
	10	お母さんの手伝いをしたらおもちゃを買ってくれると約束したのに、お母さんは約束を守ってくれませんでした。
悲しみ	4	大好きな人(スポーツ選手やアイドル)からもらったサインをなくしてしまいました。
	7	ペットの小鳥が、ある日急に死んでしまいました。
	11	仲のよい友だちが転校してしまいました。

の例は「テスト勉強をがんばったら、今までで一番いい点数がとれました。みんなにもほめられました」であった。また怒りを喚起する文章の例は「大好きなおもちゃを友だちに貸したら壊されました。しかし友だちは謝ってくれません」、悲しみを喚起する文章の例は「大好きな人(スポーツ選手やアイドル)からもらったサインをなくしてしまいました」であった。

c) 仲間評定

仲間評定は、EES尺度日本語版の一部を用いて、自分以外の同性のクラスメイトの感情表出性を評定するものであった。

まず尺度の中から、子どもにも理解しやすい3項目を抽出し、意味内容が変わらないように文言を修正した。その3項目とは「この友だちは、気持ちをよく言葉に出す」、「この友だちの気持ちは、誰から見てもすぐわかる」、「この友だちは、気持ちをよく顔に出す」であった。

そして自分以外の同性のクラスメイトについて、「全然そうではない」1点から「いつもそうである」4点の4件法で評定してもらった。

iii. 倫理的配慮

学校長およびクラス担任に研究目的、方法等を説明した。調査日は、時間割の都合等でクラス担任および児童に負担の少ない時を選択してもらった。データ処理時も匿名化するため学校および個人の特定はできないことを説明した。以上の内容の理解を得て、研究参加の同意を得た。

調査は、研究者もしくはクラス担任が児童に説明して行った。その際児童への配慮として、調査に参加したくない者は白紙で提出してもよいこと、答えたくないあるいはわからない質問にも答えずによいこと、成績にも関係ないことを説明した。加えて仲間評定の場合は、無記名で行うため誰が答えたかはわからないことも説明した。上記の項目は質問紙の表紙にも記載した。

3. 結果

EES尺度日本語版と物語り法および仲間評定の相関

得点算出方法は、物語り法は、12文すべての点数を合計した。仲間評定は、3項目の合計を評価者数で割り平均点を算出した。

EES尺度日本語版合計点と物語り法得点の相関、およびEES尺度日本語版合計点と仲間評定得点の相関をみるために、それぞれピアソン相関係数を求めた(表4)。

EES尺度日本語版合計点と物語り法の相関係数は、全体 $r = .14$ 、男子 $r = .11$ 、女子 $r = .19$ と低かったがすべて正の相関であり、全体との相関、女子との相関は有意であった( $p < .05$ )。

表4 教師評定合計点と物語り法・仲間評定の相関

	物語り法			仲間評定		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
教師評定合計点	.14*	.11	.19*	.51**	.39**	.62**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

EES 尺度日本語版合計点と仲間評定の相関は全体  $r = .51$ , 男子  $r = .39$ , 女子  $r = .62$  であり, すべてにおいて有意な正の相関が認められた ( $p < .01$ ).

以上の結果から, EES 尺度日本語版の構成概念妥当性はほぼ認められた。

#### IV. 考 察

本研究では, 小学校 4 年生以上の児童を対象に, EES 尺度日本語版作成を目的とし, 研究 1 で EES 尺度日本語版の内的整合性および因子的妥当性の検討, 研究 2 で構成概念妥当性の検討を行った。

その結果, Kring ら<sup>14)</sup>が作成した尺度と同様に 1 因子構造を示し, 信頼性で内的整合性ならびに安定性, 妥当性では因子的妥当性および構成概念妥当性がほぼ認められた。

しかし構成概念妥当性において, 教師による他者評価と友人による他者評価にはかなり相関があったが, 教師による他者評価と物語り法による自己評価との相関は小さく, 特に男子は有意な相関を認められなかった。これは, 抽象的思考や客観的思考, 自分の認識活動について客観視できる能力がちょうど 10 歳頃から発達し始める頃であること<sup>17, 18)</sup>, またその能力については個人差と同時に女子の方が発達が早いという性差<sup>19)</sup>が関連すると考える。さらに, 友人による他者評価は複数の評価が得られるために信頼性が高くなりやすいのに対し, 自己評価は自分一人のみの評価であることから, 信頼性が得られにくいという測定方法の限界が関連していることが考えられる。

また, 本尺度は Eisenberg ら<sup>5)</sup>の尺度をもとに作成されたが, 項目数の多さや内容の重複など, 尺度項目の精選も必要であると考え。今後も研究を重ねて, より使いやすく精度の高い尺度を作成したい。

さらに, 本尺度は, 子どもの感情表出性を教師の評定により測定する尺度である。教師が評定する理由は, 子どもが自己を客観視して捉える力が発達途上であるためである。教師は, 子どもとの継続的な関わりの中で子どもの特性を捉え, 客観的に評価することができる。しかし, 感情表出という主体的な体験を他者が評定するということには, どうしても限界があると考え。本人は十分感情を表出しているつもりでも, 評価者の基準・価値観を通して見ると感情表出が乏しいと評定される等, 食い違いが生じる可能性が十分考えられる。感情を表出するということについての教師自身

の価値観について, 教師自身が自覚し, 評定の際には先入観がないか, 謙虚になる必要がある。そして謙虚に評定しようとするすることで, 子どもの様子に改めて向き合うことができるよい機会となるのではないかと考える。

また, 教師が捉える子どもの様子は, あくまで学校での様子である。家族といる時の子どもの感情表出は全く違う場合もあるため, 本尺度で捉える子どもの感情表出性にはそのような限界があることも考慮にいれておく必要がある。

さて, 本研究で EES 尺度日本語版が作成され, 初めて日本における小学生の感情表出性の定量的なデータが得られたことになる。感情表出性得点を男女で比較すると, 女子の方が点数が低い, つまり感情表出性が低いということが言える。小学校高学年を対象とした社会的スキル研究において, 向社会的行動が女子の方が高いという結果<sup>20-22)</sup>と併せて考えると, 社会性が獲得されてくると感情表出性が抑えられるという発達の变化が推測できる。

このような, 日本の子どもの感情表出性の発達の特徴や健康・適応との関連などについて, 今後研究を重ねて明らかにしていき, 各個人の感情表出性に応じた対応を教師等ができることで, 健康や適応状態を促進させ, 障害を軽減させる, 一次予防の観点での活用ができることよいと考える。

#### 謝 辞

本研究に協力してくださいました各小学校の校長先生およびクラス担任の先生方, 児童の皆様に感謝いたします。

#### 文 献

- 1) Gross JJ. Emotion and emotion regulation. Pervin LA, John OP, Robins RW, eds. Handbook of personality: Theory and research. 2nd ed. New York: Guilford, 1999: 525-552.
- 2) 北村英哉, 木村 晴, 編. 感情の制御, 感情研究の新展開. 第 1 版. 京都: ナカニシヤ出版, 2009: 193-194.
- 3) Eisenberg N, Zhou Q, Losoya S, et al. The relations of parenting, effortful control, and ego control to children's emotional expressivity. Child Development 2003; 74: 875-895.
- 4) 澤田瑞也. 感情の発達と障害. 第 1 版. 京都: 世界

- 思想社, 2009 : 55-56.
- 5) Eisenberg N, Losoya S, Fabes R, et al. Parental socialization of children's dysregulated expression of emotion and externalizing problems. *Journal of Family Psychology* 2001 ; 15 : 183-205.
  - 6) Cole PM, Zahn-Waxler C, Fox NA. et al. Individual differences in emotion regulation and behavior problems in preschool children. *Journal of Abnormal Psychology*, 1996 : 105 : 518- 529.
  - 7) Hollaender J, Florin I. Expressed emotion and airway conductance in children with bronchial asthma. *Journal of Psychosomatic Research* 1983 ; 27 : 307-311.
  - 8) 塙 朋子. 関係性に応じた情動表出—児童期における発達的变化—. *教育心理学研究* 1999 ; 47 : 279-282.
  - 9) 平林秀美, 柏木恵子. 情動表出の制御と対人関係に関する発達の研究. *Human Developmental Research* 1993 ; 9 : 25-39.
  - 10) 藤永亜津沙, 児島達美. 児童の感情表出の制御に影響する家族関係についての一考察—Family System Test の可能性—. *Junshin Journal of Counseling Center* 2008 ; 5 : 61-70.
  - 11) Gross J, John O. Faces of emotional expressivity : Three self-report factors and their correlates. *Personality and Individual Differences*, 1995 ; 19 : 555-568.
  - 12) King L, Emmons R. Conflict over emotional expression : Psychological and physical correlates. *Journal of Personality and Social Psychology* 1990 ; 58 : 864-877.
  - 13) Strayer J. Children's concordant emotions and cognitions in response to observed emotions. *Child Development* 1993 ; 64 : 188-201.
  - 14) Kring A, Smith D, Neale J. Individual differences in dispositional expressiveness : Development and validation of the emotional expressivity scale. *Journal of Personality and Social Psychology* 1994 ; 66 : 934-949.
  - 15) Gross J, John O. Mapping the domain of expressivity : Multimethod evidence for a hierarchical model. *Journal of Personality and Social Psychology* 1998 ; 74 : 170-191.
  - 16) 保坂 亨. 児童期・思春期の発達. 下山晴彦, 編. *教育心理学 II*. 第1版. 東京都 : 東京大学出版会, 1998 : 103-108.
  - 17) 須賀恭子, 高橋恵子. 直観的思考から具体的操作へ. 波多野完治, 編. *ピアジェの発達心理学*. 第1版. 東京都 : 国土社, 1996 : 70-98.
  - 18) 服部祥子. 生涯人間発達論. 第2版. 東京都 : 医学書院, 2010 : 76-89.
  - 19) 澤田瑞也. 感情の発達と障害. 第1版. 京都 : 世界思想社, 2009 : 144-156.
  - 20) 渡部玲二郎. 児童における対人交渉方略の発達—社会的情報処理と対人交渉方略の関連性—. *Japanese Journal of Educational Psychology* 1993 ; 41 : 452-461.
  - 21) 奥野誠一, 藤野二沙子, 糸井尚子. 小学生の社会的問題解決と適応感との関連—対人交渉方略の視点から—. *立正大学心理学研究所紀要* 2008 ; 6 : 17-26.
  - 22) 嶋田洋徳. 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究. 第1版. 東京 : 風間書房, 1998 : 132-143.
- [Summary]
- The purpose of this study was to develop the Japanese version of the Emotional Expressivity Scale for children, which is a teacher-report questionnaire originally developed by Eisenberg and colleagues. In Study 1, 23 homeroom teachers completed this questionnaire for fourth-through sixth-grade elementary school children (n=561) to investigate its factor structure and internal consistency. Moreover, in order to examine test-retest reliability, it was administered twice, about four weeks apart, to 11 teachers of those teachers for their 285 children. Statistical analyses of the data yielded one factor, and confirmed that the questionnaire was reliable and internally consistent. In study 2, construct validity was examined utilizing vignettes for 358 children and peer ratings for 179 children, which resulted in confirming construct validity. Limitations and future research are discussed.
- 
- [Key words]
- emotional expressivity scale for children, teacher-report questionnaire, develop questionnaire